

【シンポジウム 要旨】

ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド

オスカー・ワイルドとアメリカとの関係を考えた時、作家・詩人としてよりは派手な唯美主義者として知られていた頃のワイルドが、コミック・オペラ『ペイシャンス』のアメリカ公演の宣伝もかねて1882年から1年ほどアメリカに滞在し、講演を行ったことを思い出す人は多いであろう。英国における唯美主義を象徴する存在としてアメリカに渡ったワイルドは大いに注目されたが、ワイルドとアメリカとの関係は、この講演期間だけにとどまるものではなく、ワイルドや彼をとりまく時代を研究する際の一つの重要な視点となりえる。例えばこのアメリカでの経験はワイルドの価値観やその後の作品に影響を与えていると言えるし、一方でアメリカにおいてもワイルドのイメージは、同国の文学・文化に少なからぬ影響を与えていたという。さらには彼の死後には、ワイルドに関する充実した資料がアメリカに集まっていたことは注目に値する事実であり、ワイルドの文学史上の評価の形成過程において、アメリカという視座から得られる発見は多い。本シンポジウムは、ワイルドが語り、描くアメリカのイメージと、アメリカ側からワイルドを見た時に明らかになるものとの両方に注目する。それは言い換えれば、ワイルドを環大西洋的文学・文化の文脈に配置し直す試みであるとも言えよう。

「カンタヴィルの幽霊」が描く〈アメリカ〉
公爵夫人となった少女ヴァージニアをめぐる

輪湖 美帆

ワイルドの「カンタヴィルの幽霊」(1887年)においてイギリスとアメリカとが皮肉的に対比されていることは、誰の目にも明らかであろう。それはこの物語の冒頭にも象徴されている。すなわち、イギリスのカンタヴィル卿が、自身の屋敷に幽霊が憑いていることを忠告しても、アメリカ公使オーティス氏が幽霊を家具の一部のように見なし、臆せず屋敷を購入するシーンである。こうした対比が成り立つ理由の一つとして、当時イギリスの貴族が次第に経済力を弱めていた一方で、新たに富を蓄えたアメリカの富豪たちがイギリスの社交界で存在感を増していたという時代背景が挙げられる。ここでは特に、裕福な家庭のアメリカ人女性が、イギリス貴族と結婚する例が当時英米で話題になっていたことに注目したい。ワイルド自身、エッセイ「アメリカの侵略」(1887年)において、イギリス社交界におけるアメリカ人女性たちの魅力等について語っている。こうした時代背景を踏まえ、本発表では、屋敷に憑く幽霊の望みを叶えて屋敷に平和をもたらし、若い公爵と結婚することになる、アメリカ公使オーティス氏の娘、少女ヴァージニアに注目することで、本物語の中に描かれる

アメリカのイメージを析出したい。

ウィルダネスの活用

環大西洋文学空間における〈ワイルド・ウェスト〉の生成

貞廣 真紀

アメリカのジャーナリズムがインタビューを通じてワイルドを受容したことは、彼の言葉よりその服装や髪型、英語のアクセント、振る舞いに人々の注意を喚起することになったが、同時にそれは、彼をアメリカの地域に紐付けることにも貢献した。アメリカの地方誌は繰り返し土地についての感想を求め、ワイルドは（リップサービスも込みで）西部に対する関心を表明し続けた。以来、バッファロー・ビルとワイルドを併置した新聞記事やテレビ西部劇『西部のパラディン』、あるいは『ワイルド・ウェスト』（*Wilde West*）と題されたチャールズ・マロヴィッツの戯曲やウォルター・サタスウェイトの現代小説に至るまで、西部コネクションはアメリカにおけるワイルド受容の一つの傾向を示している。「イギリス文化の影響を受けず独自の発展を遂げた土地」、すなわちアメリカの真髄としての「西部」は、人種、ジェンダー、セクシュアリティの「辺境」（wilderness）のイメージャリーの集積庫であり、人種的、文化的に多様化しつつあったイギリス像の投影でもあった。ワイルドを結節点として膨張する「西部」——本発表が考察を試みるのは、この〈ワイルド・ウェスト〉の形成過程である。

アメリカに売られたワイルド

アメリカに所蔵される資料から読み解く

宮崎 かすみ

ワイルドに関するもっとも充実した資料が、UCLA 附属クラーク記念図書館所蔵のものであることに異論はないだろう。テキサス州立大学ハリー・ランサムセンターも、少数ながら侮れない貴重な資料の所蔵を誇る。当発表では、手稿を含む書簡という一次資料を読む醍醐味をご紹介できればと考えている。ワイルドの貴重な資料群がアメリカに渡った経緯を辿る手がかりとなる書簡、さらにワイルドの遺産をめぐる人間模様が垣間見える他の書簡などを通して、伝記から漏れ落ちたドラマを浮かび上がらせたい。その他にも、アメリカの二つの図書館が所蔵する資料をいくつか紹介しながら、英文学研究における一次資料利用の可能性を考えてみたい。

ヘレン、リリー、メアリー
ワイルドとアメリカ再考

原田 範行

David M. Friedman が *Wilde in America* (2014) において詳述しているように、ワイルドとアメリカの関係は、1882 年のワイルドのアメリカ滞在と講演の諸側面に注目することでまずは一定の理解をすることができる。だが、彼のこのアメリカ滞在と講演、そして広く 19 世紀後半から 20 世紀にかけての環大西洋的交流は、より多くの視点から、ワイルドとアメリカが持つ文学的・文化的意義を明らかにするものでもあろう。今回のシンポジウムでの発表では、ワイルドのアメリカ講演を同時期にアメリカで支えた Helen Carte (Richard D'Oyly Carte の妻)、ワイルドと同時期にアメリカ公演を重ね、彼の脱イギリス的生活感覚や価値観に影響を与えた Lily Langtry、そして、ワイルド没後、彼の手稿や初版本コレクション形成にかかわり、その文学史的評価に関与した Mary Morley Crapo Hyde Eccles (Viscountess Eccles) という三人の女性を軸に、ワイルドとアメリカの関係への再考を試みたいと考えている。